子どもが自分らしく学び続けるために

― 通級による指導と在籍学級をつなぐ視点と役割 ―

中学校編

このリーフレットは、国立特別支援教育総合研究所 発達・情緒障害教育研究班の活動として作成しました。令和３年度から、全国の通級担当者を対象としたワークショップを通して指導実践に関する情報収集を行い、特に効果的な指導・支援を実施している通級担当者６名（小・中学校各３名）を選出し、意見交換会を開催しました。意見交換会で得られた知見を整理し、通常の学級と通級による指導の連携・協働を視点に、実践経験を積んだ通級担当者に期待される視点と役割をまとめています。

指導・支援の振り返りや校内の理解啓発にご活用ください。

独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所
NISE
National Institute of Special Needs Education

ご意見等は
こちら

ダウンロードは
こちら

通級指導教室担当者として経験を重ねた先生方へ

―今、求められる役割とは ―

通級による指導（以下、「通級」）に取り組まれてきた先生には、これまでに積み重ねてきた実践を基盤として、より実効性のある支援へと発展させていくことが期待されています。そのためには、校内や関係機関との協働が重要となります。

一層大切にしたい“協働”の視点

「パターン化」「マニュアル化」からの脱却

これまでの指導・支援の経験を活かし、学級担任や学年団と共に、その子の姿を丁寧に**見立てる**ことが大切です。子どもの将来を見据えつつ、一般的なパターンに当てはめていないか、個に応じた支援になっているかを共に考えましょう。

「終わりを見据えた」支援の展開

通級は、永続的に利用できるものではありません。「いつまでに、どのような力を育てるのか」を学級担任と共有し、目標を明確にしながら、在籍学級での学びへと**つなげていく**ことが重要です。

子どもの得意を起点とした支援

子どもの得意や強みを校内で共有し、学級担任や支援チームと連携して学習や生活に生かしていくことが求められます。得意から支援を組み立てることで、子どもの自信を支えるとともに、協働の広がりにも**つながり**ます。

PDCA サイクルを意識した指導・支援

計画（Plan）・実行（Do）・評価（Check）・改善（Act）の各段階を、通級担当者だけで完結させるのではなく、学級担任や関係者と連携をしながら振り返ることが大切です。日々の支援を共有し見直すことで、より実効性のある改善が可能になります。

在籍学級との情報共有

通級で身に付けた力を在籍学級でも発揮するためには、学級担任と子どもの姿を共に見立て、情報を共有することが不可欠です。通級担当者が学級担任や教科担当に**伴走**することで、一貫した指導・支援が実現します。

学外・地域との「協働」への発展

子どもが育つ地域で支援の輪を広げるためには、保護者や関係機関に対して、通級での見立て、大切にしている視点や支援の意図、子どもの変化等を分かりやすく共有することが重要です。必要に応じて、家庭や地域での関わり方の工夫を具体的に示し、役割分担を確認します。学校と家庭・地域の支援の方向性が一致することで、環境全体で一貫した支援が可能となり、継続的な支援につながります。

協働のために大切にしたい“３つ”の観点

み たてる
つ ながる
ば んそうする

通級を受けている子どもが、自分の力を正しく理解し、その力を生かしたり、苦手なことへの向き合い方を学んだりするためには、在籍学級との協働が欠かせません。そのためには、通級担当者としての役割を果たしながら、在籍学級の担任と共に、子どもの成長がつながるよう支援していくことが求められます。その際に大切にしたいのが、「みつば（見立てる・つながる・伴走する）」の３つの視点です。

「みつば」の考え方

「見立てる」とは、子どもの成長を見据え、指導・支援を段階的に積み重ねるために、子どもの状態や発達段階を丁寧に把握することです。そのため、通級での学びだけでなく、在籍学級での学習や生活の様子も踏まえて実態を捉えることが欠かせません。実態把握から見えてきた「得意なこと」「苦手なこと」を整理し、目標や課題を明確にすることが、深い子ども理解の出発点となります。

「つながる」とは、子どもの見立てや通級で取り組んだ内容を学級担任をはじめ、子どもと関わる人と共有し、合理的配慮を検討することです。通級でつけた力が在籍学級をはじめ日常生活や学習に生かされてこそ、“活きた力”として定着します。そのためには、学校全体での連携が不可欠です。

「伴走する」には２つの側面があります。

１つは**「子どもに伴走」**することです。

子どもの可能性を信じ、成長やつまずきに寄り添いながら共に考え、共に歩む姿勢を大切にします。子どもが自己理解や自己調整を深めたり、得意なことを生かしたりできるように支援し、通級での学びを在籍学級での生活へと橋渡しします。

もう１つは**「教員に伴走」**することです。

学級担任が子どもを支える中で直面する悩みや課題に対し、共に考え、指導・支援の工夫を探ります。通級担当者が学級担任や教科担当に伴走することで支援力が高まり、結果として子どもの学びや生活の質の向上につながります。

これら三つの視点を意識することで、通級での指導・支援は在籍学級での生活や学習と確実に結びつき、子どもを中心とした多面的な成長を支えるものとなります。

見立てる

通級は、子どもの姿の「見立て」によって指導・支援の方向性が決まります。子どもの得意と苦手、さらに苦手の背景を共有することで、学級担任や教科担当、また支援チームとの連携がより効果的なものになります。

日々の関わりの中でこんなことはありませんか？

・「苦手なこと」の確認が中心となり、「得意なこと」にあまり目を向けられていないことがある
・苦手な状況の原因を子どもの特性から考えることに着目しすぎて、在籍学級の環境等、社会モデルの考え方に立った見立てになっていないことがある
・通級が継続しても、指導・支援の効果や子どもの成長を踏まえた見立ての更新が行われていないことがある

“深い見立てと子ども理解”に向けて

◆子どもの姿を多角的に捉える

同じように見える行動でも、背景や状況によって意味は異なります。表面的な「できる／できない」にとらわれず、願いや困りごと、可能性にも目を向けることが大切です。広い視点で子どもの姿を捉えることが、より適切で効果的な指導・支援につながります。

◆環境との相互作用を視野に入れる

子どもに見られる困難な状態は、子どもの特性だけでなく、在籍学級や学校全体の環境との関係を含めて見立てることが重要です。環境との相互作用を踏まえることで、学びの環境を整え、力の発揮につながります。

◆継続的な観察と変化の把握により見立てを更新する

初期の見立てにとどまらず、日々の様子や成長を踏まえて柔軟に見立てを更新していくことが大切です。継続的な観察を通して変化を捉えることで、支援の方向性をより確かなものにしていきます。

Column

診断名だけでなく、子どもの言葉や姿、成育歴からわかることも

進学の際、学級担任は小学校の担任から「A さんは限局性学習症で算数が苦手」と引継ぎを受けました。入学後、A さんは数学の時間にぼんやりしていたり、寝ていたりすることが多く、学級担任は数学の教科担当に支援をお願いしました。しかしながら、状況に変化がなかったことから、学級担任の勧めで、本人と保護者が通級担当者へ相談に来ました。

A さんは、通級指導教室に置いてある様々な教材に興味を示し、「これは何ですか」と次々に質問してきました。保護者との会話中でも、気にせずに初見の通級担当者に声を掛けてきます。保護者からは「すみません、子どもの頃から、落ち着きがなくて」という言葉が出てきました。本人からは、自分はいろいろなものにすぐにハマるが、すぐに飽きてしまうこと、興味がないことは、話を聞いていると頭がぼーっとしてきて眠くなること、部屋や机上がぐちゃぐちゃで忘れ物が多いことなどが語られました。

通級では、数学の内容を取り扱った指導だけでなく、注意集中のスキルに関わる指導も行いました。学級担任には診断名だけではなく、「注意集中が苦手な子ども」という視点で行動観察や指導・支援を考えることを提案しました。また、保護者を通してかかりつけの医師と学校での様子を共有しました。その結果、医療機関との連携も始まり、徐々に学習面、生活面で落ち着きが見られるようになりました。

つながる

通級での見立て、指導・支援の内容や大切にしている視点を共有し、学年や校内全体で一貫した対応を行うことが、子どもの安心感を高め、確かな成長につながります。これまでのつながりの質を見直し、より確かな連携を意識していくことが大切です。

日々の関わりの中でこんなことはありませんか？

・通級での学びが在籍学級での学習や生活に十分に結び付かず、子どもの力を生かしきれていないことがある
・学級担任とのやり取りの機会が限られ、指導・支援の工夫が日常の場面に生かされにくいことがある
・校内外の関係者との情報共有が十分でなく、指導・支援が広がりにくいことがある

“指導・支援をつなぎ、広げる連携”に向けて

◆協議の場を設け、多様な視点を生かす

校内支援会議などの場で、複数の教員が子どもの姿を見立てることが大切です。指導・支援の方向性を確認し、必要に応じて調整する機会をもつことが、学校全体での取組の一体感を支えます。

◆日々の指導・支援内容と目標を共有する

自立活動や日常の指導・支援の様子、個別の教育支援計画・個別の指導計画に基づく目標や方法を、学級担任や関係者と共有することが重要です。共通理解が広がることで、一貫した支援が実現します。

◆指導・支援の「般化」を意識し、日常的なかかわりを大切にする

通級で培った工夫を学校生活全体に広げる視点を持ちましょう。日々の会話や交流の中で変化や工夫を共有することで、指導・支援が定着しやすくなります。気軽に声をかけ合い、支援をつなぐ流れをつくっていくことが大切です。

Column

いつでもどこでも支援が受けられるように

Ｂさんは、板書をノートに書き写すことが苦手で、注意されると徐々に殴り書きのような乱暴な字になっていきます。学級担任が「もっと丁寧に書きなさい」と指導しても変化がないことから、「通級で丁寧に字を書く練習をしてほしい」と依頼がありました。

Ｂさんに文字を書くことについて尋ねると、「すぐに疲れてしまう」「もっときれいに書けと言われるが、自分は丁寧に書いている。これ以上どうしろと言うのか」との返事でした。

そこで、パソコンを使ったテキスト入力を試してみることにしました。すると手書きの時は３０分以上かかっていたワークシートが、テキスト入力ならば１０分もかからず終えることができました。そこで、書かないのではなく、書けないことを本人も悩んでいたことや、代替支援の利用が効果的であることを学級担任に伝えました。

その後、「教室でもパソコンで入力したい」と希望があったため、学級担任と相談のうえ校内支援委員会で審議し、合理的配慮として通常の授業のテキスト入力が認められました。高校入試の際にも同様の配慮が受けられるよう、個別の教育支援計画や個別の指導計画にも明記し、学校全体で共有しました。

現在、学年が変わっても、どの教科でもテキスト入力を行っています。定期考査はもちろん、業者テストもテキスト入力で受験しています。高校入試だけでなく、高校や大学に進学後も「テキスト入力を認めてほしい」と自分自身で言えるように、自己理解やセルフアドボカシーの育成にもつながりました。

子どもに伴走する

子どもに伴走するとは、子どもの可能性を信じ、共に考え、共に歩むことです。日々の指導・支援の中で、自らが「伴走者」としての姿勢を大切にできているか、子どもの声に寄り添い、共に歩む姿勢でいるかを意識することが大切です。

日々の関わりの中でこんなことはありませんか？

・子どもの心の奥にある悩みや願いに十分に耳を傾けられず、表面的な対応で終わってしまうことがある。
・「このほうがよいはず」と担当者の考えを優先し、子どもの考えを後回しにしてしまうことがある。
・進路や将来を考える場面で、本人の希望よりも保護者等の意向を優先してしまいがちである。

子どもの成長を支える“寄り添いと共育”に向けて

◆子どもの声を聴き、受けとめる

子どもの悩みや願いを丁寧に聴き取り、その背景を理解することが伴走の出発点です。大人の考えを押しつけるのではなく、子どもの思いを尊重し、共に考える姿勢を大切にしましょう。

◆共に考え、共に歩む視点を持つ

「どう導くか」ではなく、「どう支えるか」「どう共に考えるか」という視点を大切にします。生活や進路に関わる課題についても、子どもと一緒に考え、工夫していく姿勢が伴走につながります。

◆将来を見据えた支援を共有する

本人の希望を尊重しながら、学級や家庭、支援者全体で見通しを共有することが、子どもの安心と成長を支えます。「今」の指導・支援に加え、「将来」を共に見通す姿勢を意識していきましょう。

Column

子どもの将来を見据えて

限局性学習症と診断されたCさんは、教科書の音読や内容理解が苦手でした。板書を時間内にノートに書き写すことが難しく、また、書き写しても、それを読むことが難しい状態でした。そこで、通級で読み書きの学習を行うことになりましたが、通級でも、読み書きの学習は嫌がりました。そこで、ゲーム要素をもたせた教材の利用やICTを使った学習などを試しながら、Cさんがより学びやすい方法を一緒に考えました。ICTの活用は、音声による支援が得られること、手書きやテキスト入力で正しい漢字の読み方や書き方を自分で調べられるため、「これがあればできる」と学習に対する自信と意欲を取り戻す原動力になりました。

この過程や成果を学級担任や保護者と共有したところ、合理的配慮が提供されることになりました。漢字テストで満点近い点数を取れるようになり、自信をもって高校に進学しました。高校進学後は専門学校を経て就職しました。自動車の運転免許、仕事で必要な資格試験はすべて一発で合格したそうです。

今では立派な社会人となったCさんですが、もちろん読み書きの困難さは残っており、スマートフォンを駆使してその苦手さを補っているそうです。「もし、通級を受けていなかったら、勉強は無理って、今でも諦めていたと思う。通級で勉強したからこそ、今の自分がいる」と、Cさんは言ってくれました。子どもの将来も見据えながら、「この方法ならできる」「自分でできる」とその子自身が感じられるよう、時には一緒に、時には見守り、その成長を支えた結果、報告のような成長を知ることができました。

教員に伴走する

学級担任の悩みや願いに寄り添い、手立てを共に考えることが授業や学級経営の改善に結びつきます。学級担任との協働の在り方を改めて確認し、支援を広げる視点を意識することも大切です。日々の積み重ねが学校全体を動かす鍵となります。

日々の関わりの中でこんなことはありませんか？

・学級担任や教科担当の悩みよりも、対応の課題に対する指摘が中心になってしまったり、担任の悩みが十分に共有されないまま支援が進んでしまうことがある。
・学級の子どものことは自分が何とかしないと一人で抱え込んでいる学級担任に対し、遠慮して声を掛けられないことがある。

学級担任の取組を支える“寄り添いと協働”に向けて

◆指導・支援内容を学級担任や教科担当と共に振り返る

観察や支援の経過を担任と共に確認し、子どもの変化を共有することが大切です。学級担任や教科担当が「伴走されている」と感じられる関係が、学級全体ひいては学校全体に指導・支援を広げる基盤になります。

◆困難と強みをつなぐ視点を持つ

子どもの「苦手なこと」だけでなく、「得意なこと」にも目を向け、それを学級での活動につなげていくことが大切です。子どもの自信や役割意識を支えることが、結果的に担任の自信にもつながります。

◆日常に自然に取り入れる工夫

新しい仕組みを増やすのではなく、既存の授業や係活動、学校行事の中に指導・支援を位置付ける工夫が大切です。指導・支援が「特別なもの」ではなく「日常の一部」となることで、無理なく継続できる取組につながります。

Column

子どもはもちろん、担任も困っている

通級に通うＤさんは「在籍学級でいじめられている」「担任の先生は私のことを信じてくれない」と訴えてきました。Ｄさんの話を傾聴していると、学級担任は理解のない人に思えてきます。しかしある日、学級担任から「Ｄさんについて相談したい」と連絡が来ました。「暴言や迷惑行為が連日続き、学級の子たちはＤさんを避けるようになっています。Ｄさんが孤立しないように自分は何をすればいいのでしょう」ととても悩んでいました。実際はとてもやさしい先生でした。

Ｄさんは友達と仲良くしたいと思っていました。そこで、学級担任から学級で起こった出来事を報告してもらい、それをアレンジした教材を作り、望ましい言動についてＤさんと考えることにしました。通級ではＤさんの頑張りや褒めてほしい点などを連絡帳に記入します。学級担任には、通級の後にＤさんと一緒に連絡帳を見ながら学習内容を確認し、褒めてもらう時間を作ってもらいました。すると、次第にＤさんは学級担任への信頼感をもちはじめ、学級でのトラブルも減っていきました。

通級で見せる姿が在籍学級で見せる姿と同じとは限りません。通級担当者はこの経験から、通級担当者が一人の考えで対応するのではなく、学級担任や関係教員と日常的に情報をつなぎ、協働して指導・支援をしていくことの大切さを強く実感しました。

通級による指導を担当する先生方へ

通級で先生方が積み重ねてきた指導・支援には、子どもの「困り」や「悩み」の背景にある要因を丁寧に把握し（見立て）、在籍学級や保護者とつながりをもって支援する（つながる）と共に、子どもや学級担任の不安や喜びに寄り添う（伴走する）といった視点があったかと思います。

この３点は通級に期待されている基本的なことですが、初任ではその本質が捉えづらく、対応が難しいものです。一方、少し指導･支援の経験を積んだ先生にとっては、本当に子どもが自分らしい成長を歩むための支援につながっていたかを振り返ることが求められる段階になります。そこで、気づきのきっかけになって欲しいという思いから、これらのポイントをリーフレットにまとめました。

時には迷いや悩みに直面することもあると思います。それでも、子どもの成長を同僚や保護者と分かち合いながら指導・支援を積み重ねていくことが、子どもにとっても通級を担当する先生にとっても次の一歩を踏み出す力になります。

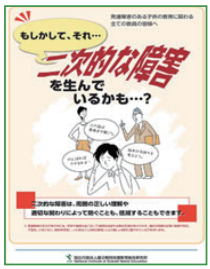
本リーフレットが、先生方の実践を振り返る機会となり、「みつば」の視点を通して、子どもと共に歩む力をより確かなものにする一助となれば幸いです。

参考資料 ／ リンク集

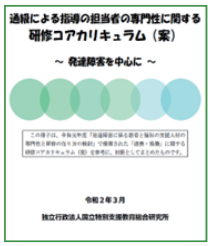
通級による指導を行う上で、参考となる資料を紹介します。
ご自身の指導・支援の充実や振り返り、学級担任との連携に活用いただけます。

● **文部科学省（2020）**
「初めて通級による指導を担当する教師のためのガイド」
https://www.mext.go.jp/tsukyu-guide/

● **国立特別支援教育総合研究所（発達・情緒班）（2021）**
「発達障害のある子供の教育に関わる全ての教員の皆様へ
もしかして、それ･･･二次的な障害を生んでいるかも･･･？」
https://nise.repo.nii.ac.jp/records/2000609



● **国立特別支援教育総合研究所（発達障害教育推進センター）（2020）**
「通級による指導の担当者の専門性に関する研修コアカリキュラム（案）～ 発達障害を中心に～」
https://nise.repo.nii.ac.jp/records/2001307



● **国立特別支援教育総合研究所（横断的研究）（2018）**
B-319「特別支援教育における教育課程に関する総合的研究
－通常の学級と通級による指導の学びの連続性に焦点を当てて」－
https://nise.repo.nii.ac.jp/records/2000236

2026.3.31 発行